

天文学とプラネタリウム

第139回



今月のお題

ニュータイプ天文学



これまでシニアを対象にした活動の組み立て方を勘違いしてましたので、その反省をします。

今冬は六本木ヒルズで「星空のイルミネーション」!



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)

平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

天プラではこれまで、「30-40代の女性」とか「小学校低学年」など、ターゲットを明確に意識した活動をデザインしてきました。人々に天文学を……と試してみても、“人々”の指す範囲が広すぎて、そこから誰にでも受け入れられるようなモノを産み出すのは難しいと思っているからです。私たちが遊んで欲しい人々を具体的にイメージし、彼らがついつい一緒に遊びたくなるような、面白い仕掛けをする。そんなことをいつも考えてきたと思います。まあ、その結果がトイレットペーパーとかなんですけどね。

さて、そう思ってこれまでの活動を振り返ったときに、実はシニア層をあんまりちゃんと考えていなかったな、ということに今更ながら気がつきました。一般的な天文講演会では、シニア層は主要な参加者です。特に出会えないということではなく、いつでも出会える人たち。だから、ニッチを攻める天プラとしては、シニア層以外をターゲットにしよう、ということでこれまであまり真剣に考えてこなかったのです。

でも、これは私たちの理解不足でした。社会の高齢化が進む今の時代、シニア層というのは、

“人々”と同じくらいバラエティに富んだ人たちだということを理解していなかったのです。仮に65歳以上をシニア層だと思った時、その人口は全人口の25パーセント。およそ3000万人です。この人達をさらに分解して、ターゲットとして設定できないか……。

× 前期高齢者 → ○ ニュータイプ

そこでまず注目するのが、シニア層に入ったばかりの人たちです。これから人生100年時代がやってくると考えた時、65歳なんて会社に入ったばかりのようなもの。100歳まで35年(!)もあるのです。アインシュタインが特殊相対性理論を提唱したのが26歳ですから、35年もあればなんでもできるはず。ある調査によると、20代をピークに記憶力は下がっていく一方で、課題解決能力は年齢とともに上がり続けていくとのこと。物理学としての天文学を追究するのも良いですし、研究者では発想できないより広い枠組での天文学のあり方を構想するのも良いでしょう。人生経験がないとできないことが、必ずあるはずですが、社会の流れに目を向ければ、今の65歳は年



だいたいこういう時にアイデアが浮かびます。

金がきちんと支給される最後の世代で、かつ、過去にないほど健康な最初の世代とも言えます。つまり、これまでの世界には存在していなかった完全なる新人類です。彼らには、次に続く世代のためにこれまでの「シニア」ではない、新しい大人のあり方を創造してもらわないといけません。働くことや子育てから自由になった今こそ、中世のヨーロッパ貴族がそうだったように、“役に立たない”人間性の追求を存分に許される存在であるはず。天文学なんて、その最たるモノのはず。そう考えた時に、天プラとしてなにが仕掛けられるのか。しばらくじっくり考えてみたいと思います。